

強いものは美しい ―日本人初の金メダリスト 織田幹雄―

海田町立海田小学校には、織田幹雄さんのオリンピックピック金メダル受賞を記念して、大会で出した十五メートル二十一センチの長さのポールが立てられています。



明治三十八年、広島県海田市町（現在の安芸郡海田町）に生まれた織田幹雄さんは、小さいころから野山を駆け回る元気いっぱいの子どもでした。

運動が大好きだった幹雄さんが陸上に出会ったのは広島一中（現在の広島県立国泰寺高等学校）の二年生の時でした。ある日、教官から、第七回オリンピックに出場した野口源三郎さんの講習会に参加するようにすすめられました。幹雄さんの当時の身長は、一五五センチでしたが、なんと高跳びでは、自分の背丈より高いバーを跳び越えたのです。それを見ていた野口さんが、

「小さいのによく跳ぶね。君は練習すればきっと日本の代表になれるぞ。」と、声をかけてくれたのです。幹雄さんは、顔を真っ赤にして聞いていました。

そして、中学四年生の新学期、サッカー部をやめ、新しくできた徒歩部（陸上部）に入部しました。できたばかりの広島一中の徒歩部には、指導者もコーチもいませんでした。幹雄さんは、自分で本屋を歩き回り、数少ない跳躍に関する雑誌を参考に自分で工夫しながら練習を続けました。昼休みの鐘が鳴るとすぐに運動場を走り、放課後は最後まで練習していました。友だちが、

「もう帰ろう。」

と言っても、

「もう少しやってから帰る。」

と言って断りました。

誰もいなくなった運動場で、黙々と一人で練習を続けました。気がつくとい番星が輝いていることもたびたびでした。休みの日も裏庭の小さな砂場で朝から晩まで練習に励みました。

やがて幹雄さんは、いろいろな大会の「走り高跳び」「走り幅跳び」「三段跳び」などで優勝を重ね、注目されるようになりました。

そして、第八回オリンピックに出場し、三段跳びで十四メートル三十五センチの日本新記録を出し、日本陸上史上初の世界第六位入賞を果たしました。「すばらしい。」と誰もがその入賞を喜んでくれました。オリンピックが終わって、幹雄さんはすぐに次のオリンピックに向けて目標を立てました。

さらに幹雄さんの厳しい練習の日々がスタートしました。しかし、記録はなかなか思うように伸びませんでした。それどころか練習を続けるうちに、何回もひどい怪我をしまいました。

ある時、日本代表選手団の監督に、

「君、この足の怪我はひどい。放ほうっておくと、一生陸上ができないくなるぞ。」

と、言われたこともありました。

やがて新聞などで「織田はもうこれ以上記録は伸びない」と書かれるようになりました。郷里きょうりの広島に帰れば、

「もう織田はだめなのでは。やめたほうがいいぞ。」

と、まわりの人からのささやきが幹雄さんの耳にも届とどくようになりました。それでも幹雄さんは黙々と練習を続けました。

「今日の練習も・・・やっぱり記録は伸びなかった・・・。」

沈んでいく夕日を前に一人たたずみ、頭をかかえこむ日が続いていました。

それでも次の日になると、幹雄さんは、フィールドに立っていました。

「もう一度基本に返ってみよう。」

改めて自分の練習方法、跳び方をふり返ってみました。

「今までのフォームは、外国の選手の物まねにすぎなかった。勢いにまかせて跳ぶのではなく、足の裏うらで大地をたたくと同時に、上に向かって伸びあがろうとしなければならぬ。伸びる力があってこそ」本物の跳躍ができる。」

と考えました。それからは、上に向かって跳び上がる練習を繰り返し行いました。町で木の枝に跳びついたり、よその家の高い軒先のきさきにパッと跳び上がって触ふれたりしたものです。「高いもの」を見つけては跳びつき、自分の身体に跳躍力をつけることだけを考え、練習を続けました。

そして、ひと冬越して迎むかえた昭和二年、幹雄さんの記録がまた伸び始めました。

日本記録で優勝した幹雄さんは、再び、念願のオリンピックに出場を果たすことができました。

一九二八年七月二十八日、第九回オリンピック・アマステルダム大会の幕は切って落とされました。

大会六日目、(今まで誰にも負けないだけの練習をしてきたのだ。あとは全力を尽くすのみだ。)と、思いながら窓の外を見ると、輝かがやく太陽が昇のぼっていました。

いよいよ得意の三段跳びです。今までの練習が頭の中をよぎりました。幹雄さんは渾身こんしんの力をこめて跳びました。十五メートル二十一センチ。その後、その記録を抜く選手はあらわれませんでした。

アマステルダムの真つ青な大空にひらめく国旗は、太陽に照らされて光り輝いていました。それは誰も予想しなかった日本で初めての金メダルでした。大歓声かんせいの中、金メダルを手にした幹雄さんは、広い競技場に一人立っていました。そのほほには一筋ひとすじの涙なみだがこぼれていました。





その後、日本陸上競技の発展に力を尽くされた幹雄はってんさんは、「強いものは美しい」という言葉と海田小学校の運動場のあのポールに思いをたくし、九十三歳さいでなくなりました。

#### 【参考文献】

「織田幹雄 わが陸上人生」(日本図書センター)

「陸上競技ヨーロッパ転戦記 日本は強かった」

(有斐閣アカデミア)